
命の灯火が消える前に

聖司

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

命の灯火が消える前に

【著者名】

NO365A

【作者名】

聖司

【あらすじ】

余命一週間の告知をうけた神童祐はその一週間をどのように生きるか悩む。そして幼なじみの東条葵が祐の一週間に大きく関わる。

第1話 7日間の命

自分の命がたつた一週間と言われたら……あなたはどうしますか？一年でも、一ヶ月でもない、たつた一週間だつたら……あなたは、その一週間をどう生きますか？

9月18日

信じられなかつた、ただ学校で倒れただけだつたのに、ただの貧血だと思つていたのに、先生に病院に連れていかれて、俺は、思いもしない事を聞かされた。

すい臓ガンだつた……

「よくもここまでほつたらかしにしたもんだ、いくら自覚症状がほとんど無いからといつても、ひどい腰痛やらなにやらあつただろうに」

確かにあつた、貧血も今回だけじゃなく、背中やみぞおちが痛み、眠れない日もあつた、意味もなく下痢をしたり、ダイエットをしている訳もなく、体重が減つた。

規則正しい生活をしていた訳じゃない、自分の体調が悪いのは生活の乱れと勝手に解釈していた、俺は、自分の今までの生き方を呪つた。

「家族への連絡は私がしておこつ、いいね？」

大学病院の先生が何か言つている、だがそんな話を聞いているほど俺は冷静じやなかつた。

「神童 祐君？ 聞いているのかね？」

「…………なんですか？ 先生？」

「だから、家族への連絡は

「家族には……黙つてもらえますか？ 心配かけたくないんですね」

「そうか、でも必ず自分から言つんだぞ
ウソだつた……心配かけたくない、こんな理由じゃない、ただ認めたくない、それだけだつた。

「ひとつ聞いていいですか？ 僕の寿命つてどのくらいなんですか？」

「はつきり言おう、長くても一週間だ、短くて一週間もない、短くて三日、早すぎよ。シヨツクだつた、医師の話だと一週間は理想であり、実際は一週間もない、短くて三日、早すぎよ。」

9月19日

朝だ、いつもと変わらない朝、今日も学校に行かなくちゃならな
い。

「祐、朝ごはんよ、早く食べなさい」
母さんも知らない、俺の病気の事を。
「なにボ～つとしてるのよ、早く食べないと遅刻するよ」
「じちそうさま、俺もう行くよ」
「ちょっとしか食べてないじゃない、具合悪いの？」
「べつにそんなんじゃないわ、早く行かないと遅刻するだろ？」
そして俺はお気に入りのスニーカーを履いて家を出た。

「……実感ないな、病気なんて」

学校に向かつて歩きながら色々な事を考えた。

俺はまだ十五歳だ、やり残した事なんて山ほどあるはずだ、でも今はやりたいことなんて何もない、それが何よりも虚しい、そして哀しい。

「 ゆ~うくさん、おはよ~ 「

後ろから思いつきり誰かに押された、不意の事に驚いてしまって、かなり情けない感じだった。

「 うわっ！ 薫か、おどかすなよ」

隣に住んでいる、東条 薫、俺と同じ年で小さい頃からいつも一緒に遊んでいた、つまり幼なじみという事だ。

「 どしたの？ 祐君？ なんだかボ~っとしてるよ」

「 別に何でもないよ、急げよ、早くしないと遅刻だぞ」

「 自分が一番ゆっくりじやない！ 急げばこっちのセリフだよ」

「 うつむこよ、俺はいいんだよ、ほら薰、早く行けよ」

「 んじゃ学校でね！ バイバイ」

「 おひ……」

薰、俺が死んだら悲しんでくれるだろ？ か？ ……やめよ~、考
えても悲しくなるだけだ。

学校、俺は学校行く意味あるのか？ でも、サボつてもする事がない。あと一日で俺は死ぬかもしれないでも何をする気にもならな
い。

いつの間にか、教室に着いていた。やる事がないから窓際の一番
後ろの自分の席に座る。

「 どうした、貧血ボーイ、今日も朝から具合悪いのか？」

前の席に座っている高木が一人でハイテンションに騒いでいる。
「 つむせ~よ高木、親友の体調が悪いってのに、一人騒いでんじや
ね~よ」

高木 宗一、中学からの付き合いでの世界一のダチだ。

「 そういうやつ前さ、学園祭なにやるんだ？」

「 いきなりなんだよ、学園祭？ なにもしねえよ

「 やつぱりそつか、なにもしないつもりだったか。なら丁度いい、
お前を演劇やれよ」

何を言つてゐるの？ つて感じだつた。演劇？ 凡談じやない、学

園祭は今日から一週間後、その時には俺は居ないだろ。それに一

週間でセリフや動きを覚えられるか？　否、無理だろ。」

「一つだけ言つとくぞ、一週間でなにをじろつてんだ？　セリフ覚えられるか？」

「そこは大丈夫だ、お前にセリフはない！」

「……は？」

「お前は居るだけでいいキャラを演じるのだ」

「帰れアホ、俺じゃなくてもいいじゃねえか」

「お前しかいないんだよ、ヒマなヤツはよ、みんな今年、はりきつちやつてさ、ヒマなヤツいねえんだよ」

だからって、なぜ俺なんだ？　いつも病氣のことを語して全ての面倒ごとを捨てたくなつてくる。

「放課後すぐに体育館な！　よろしく～」

……ミスター無責任。それが中学の時の高木のあだ名だった。

授業も一通り終わつていつもだつたらすぐ帰るんだけど……一樣、体育館にむかつた。

気が乗らない、やる気がでない、というよりセリフが無いキャラつて要らないだろう。

そんなくだらない事を考へてるつちに体育館の前まで来てしまつた。この一線を越えたらもう後にはひけないだらつ。まあ、どうするか……

「なにしてるの？　祐君？」

背後からの朝に聞いたのと同じ声……葵だな。

「どうしたんだ？　葵こそこんなところだぞ」

「演劇の練習だよ、あー もしかして祐君、役者やつてくれるの？」

「そうだよね、ありがとー、さあさあ中に入つて入つて」

葵に強引に連れられて体育館の中に入つてしまつた。セリフなしのキャラをやらされるのか……

「祐君さ、一つしか役空いてないけどいい？　恋人のキスを見てい

る通りすがりの歩行者のひとりなんだけどさ

なんだそれ、必要なのか？ メチャクチャな人物だな、想像してたよりひどい。

「必要なのか？ その役？ いらねえだらう」

「必要……つて言うより、誰かがケガとかした時の代役みたいなさ」

「……わかったよ、ただの代役なんだな？ んじゃ、出番こねえな

「やつてくれるの？」

「いいよ、別にさ、誰もケガなんかしねえだらう」

「出番こないとは限らないんだからね！ 練習にはきてよね！」

「わかったよ」

葵との話が終わつた後すぐに練習が始まつた。さつき台本見て知つたが学生の恋人同士が結ばれるつて話らしい。やる事がないから俺はただ劇を見ていのだけだつたが、俺は初めて葵が恋人役だといふことに気付いた。

「この劇の最後つてさ、キスシーンで終わるんだつたつけ？」

今日、キスシーンもやるのだろうか？ 何故かそんな事を俺は考えた。

「なに考えてんだろ俺……バカみてえ、相手役誰だろ？」

気になつた、まだ相手役は練習に来ていないみたいだ。劇が半分ほどストーリーをどうして練習が休憩になつた、葵に聞いてみるか。

「祐君どうしたの？ 恐い顔して」

「葵？ 丁度よかつた！ お前の相手役誰なんだ？」

「相手役？ もしかしてキスのこと？」

そう言われた途端に、なぜか恥ずかしくなつた。

「高木君だよ、聞いてない？ 私が高木君に祐君誘つてつて頼んだんだよ？」

「そりなんだ……聞いてなかつたよ」

ショックだつた、高木が葵とキスをする……なんか腹がたつてきた。

俺は葵が好きなのか？ わからない、自分の事なのに。でも、葵

が高木とキスをする事に妬いているのだけは自分でもわかった。

少し風にあたると、ドアに手を掛けようとした時、丁度ドアが開いて人が入ってきた。

高木だった。

「よう！ 祐、やっぱ来ててくれたか、ありがとよ。葵ちゃんから役聞いたか？ セリフはないって言つたけど、結局は補欠で何かあつたら祐がやる事になるんだわ、ごめんな」

「聞いた、お前、役得だな、葵とキスするんだろう？」

「あっ！ それも聞いたまつたのか？ ごめんな、隠すつもりじゃなかつたんだ」

「謝るなよ、なんか……いや、何でもねえ」

謝られた瞬間に、殴りたくなつた。手に力が入つたが、殴るまではいかなかつた。

「どうした？ おい祐？ 怒つてるのか？」

「なんでもない、俺ちょっと用事あるから、練習ぬけるよ？ どうせ補欠だろ？」

「おい、祐！」

俺、何してんだろ？ バカみたいだ、高木に妬いて勝手に飛び出して……ガキみてえ。

今日はもう寝よう、体もだるくなつてきた。

一瞬でも長く生きたい、体に無理はさせられない。

明日、高木にどんな顔して会えばいいんだろ？ 意識が落ちる前にそんな事を考えた。

第1話「日闇の命（後書き）

はじめまして、聖司です。

ここに投稿する初めての小説になりますね。

感想、アドバイスなど、あつたら読者のみなさんどんどん送ってください。

よろしくお願ひします。

第2話見えない気持ち

9月20日

今日は朝から具合が悪い。医者からもらつた薬を飲もう。
いつものように、遅刻寸前だ。急ぎながら玄関のドアを開けた先
に、葵が立っていた。

「いや、用事があつただけだよ、お詫び申しあげました、早くしねえと遅刻するわ」

「何言つてゐのー！せつかく待つててあげたのに、
「遅い遅い、早くテ一づぜ！」本当に屋刻しちゃう

俺たちは学校まで走った。葵と一人で、少し話をしながら、自分の体の事なんか忘れて、学校まで走った。

「葵！ 先に行け、俺疲れた」

「考えとへん」

「それじゃあ、先に行つてるからね」

「体力には自信あつたんだけどな」

長く感じる。

道を歩いてる人にどんどん追い抜かされる。苦しそうにしてる俺を見て変な目をするやつもいる。最悪だ、助けてくれとは言わない、

だけど変な目で見る奴らが許せない。

だんだん落ち着いてきた、もつ遅刻は確定だらう。でも行こう、
今日を無駄にしたくない。

教室の扉を開けた、先生はいなかつた。チャンスだ。

高木がいる、あんまり顔をあわせたくないな。

「おはよう祐、昨日はどうしたんだ？ 怒つてたんだよ、俺なにか
変なこと言つたか？」

「いや、怒つてなんかいないよ、ホントに用事があつたんだ」

「……そうなのか？ 俺に怒つてる感じしたからさ、よかつた」「
そんなんことあるかよ、どのくらいからの付き合いでと思つてんだ
よ」

また俺は高木にウソをついた、だんだん自分に腹がたつてきた。
ウソをつく自分、自分の気持ちを隠すウソ、なんか嫌だ。

「どうした祐？ 顔が怖いぞ」

「なんでもない、ただ自分が嫌いになつただけだよ」

「なにそれ？ 意味わかんねえよ」

「理解してもらつ氣ないですよ」

普通の授業は受けている。しかし体育の授業まで受けられるほど、
体力はなかつた。適当な理由をつけて体育だけは休んでいる。授業
中に気分が悪くなる事もある。まあ、病氣のことがばれない程度に
がんばる。

高木とくだらない事を話ながら放課後を迎えた。

「今日も練習くるんだろ？」

「どうしようか？ ヒマだけど……補欠だろ？」

「劇の内容知らないと補欠もできないだらう？」

「……そうだな、行くか」

俺は何がしたいんだろう？ 補欠なのに練習に行く必要あるのか？

「どうしたんだ？ 早く行こうぜ」

「ああ……そうだな」

「あ！ 祐さ、先に行つてくれよ。俺ちょっと持つてきたい物があるんだ」

「持つてきたい物？ 早くしろよ？ お前が主役なんだから」

「そういえばアイツ、主役だつたな。

一人で体育館に行つた。まだ誰も来ていなかつた。俺は一人で舞台に腰を掛けていた。

「……ヒマだな、誰も来てねえよ

一人でいると色々考えてしまつ。

「！？」

物音がした。

演技で使う道具をしまつてている体育倉庫から物音がした。

「……誰かいいるのか？」

倉庫に入つて音の原因を確かようとした。

「ん？ 祐か？ どうした？」

「凧か？ お前こそ何してるんだよ」

斎藤 凪沙、こいつとは小学校からの腐れ縁で、高木や葵とも仲がいい。

「なんでこんなとこにいるんだよ？」

「演劇の練習の準備だよ、祐こそなにしてんの？」

「物音がしたから気になつてさ」

「ふうん、そعد丁度いいから手伝つてよ、重くて一人じゃ持てないんだ」

「みんな集まつてからでいいだろ？」

「今できる事は今やつとくの！」

「はいはい」

凧が動かそうとしていたのは大きな背景のセットだつた。女一人

で動かせるものではない。

「重！ 重いぞこれ、二人じゃキツイよ」

「男だろ！ がんばれよ」

疲れた、やつと倉庫からセットを出し終えた。

「……凪さ、演劇やつてんの？」

「舞台裏だけ、あと台本書いたの私

「ウソ？ すぐえな、お前」

「祐は？ 役者じやないよな。役決めるときいなかつたし
途中から入つたんだ、補欠だけどな」

「ふうん、祐はさ、高木に葵とられてもいいの？」

「……いきなりなんだよ、俺は関係ないだろ」

「ウソつき」

「なんだよ……だいいち台本書いたのお前なんだろ？」

「葵が役者やるなんてしらなかつたもん」

「沈黙。一人しかいない体育館は、静かで、広すぎた。
「凪、どうして俺が葵の心配しなきゃなんねえんだ？」

「……葵のこと、好きじやないの？」

「……わかんねえ、自分の気持ちがバラバラなんだ」

「祐さ、葵の病気知ってる？」

「病気？ なんだよ、それ」

「葵ね、あと一年しか生きられないんだよ」

「……冗談だろ？」

「高木も知らない、葵の両親と私しか知らないことだよ
「本當なのか？」

凪はただうなづくだけだつた。俺に聞こえてきたのは自分の心音
だけだつた。
「葵が明日からいなくなつたらどうする？」

「そんなの嫌だ」

「明日から入院するからみんなでお見舞いに行こうへー」

「……嫌だ、俺は認めねえぞ」

「葵の葬式をする、幹事を頼みたい」

「ふざけんな！ 誰がそんなもんやるか！」

「……まだわかんない？」

「……」

知らない間に、頬を暖かいものが流れていた。

「その涙は友達として？」

「……」

「違うでしょ？」

「……葵は、ホントに死ぬのか？」

「あー、それはウソ」

「……は？」

「ウソに決まつてんじやん！ あんなに元気なのに」

「ふざけんなよ！ クソ！ ウソかよ」

涙を拭きながら裏返る声で凪を怒鳴った。実際かなり情けないな。

「ありがとう、凪のおかげで気付いたよ」

「どういたしまして、でも主役交代は出来ませんから」

「わかつてゐよ」

安心した。心のそこから。葵が病気じゃない事を、俺が葵を好きだったことを。

だんだん人も集まってきて、高木も葵も体育館にきた。みんな集まつたと言つ事で、舞台の練習が始まった。俺は昨日と同じく見ているだけだったが葵の演技を、見ていたいと思つ様になつた。

「そう言えば高木さ、なに取りに戻つたんだ？」

「ん？ ビデオカメラさ、オヤジに買つてもうつたんだ。折角の学園祭だぜ？ ビデオに思い出詰め込んでおこつと思ってさ」

「おい、なに撮つてんだよ、やめろって！ 恥ずかしいだろ？？」

「いいじゃんよ、お前が俺の思い出の最初の出演者だぜ？」

悪い気はしなかった。高木の回すビデオカメラに映ることは。成人して一緒に観れればいいんだけどな。

「葵～、凪～、ちょっと来いよ～」

その後も高木はビデオを撮っていた。

今日も遅くまで練習をしていた。周りはもう暗い、他のみんなも帰り支度をはじめている。

だいたい俺たち4人は帰る方向も同じだから一緒にいることが多い。

「祐くんさ～、明日の休みに遊園地行かない？」

「遊園地？」

「そう、凪ちゃんも高木くんも一緒に行かない？」

「お！ いいね～、遊園地か、久し振りだな」

「そうね、全然行ってないわね」

「二人とも行ける？」

「もち

「私も行けるよ」

「じゃあ決定ね、祐くんも来れるでしょ

「ああ、行こうぜ」

家に帰った後も気分がよかつた。きっと明日も大丈夫だろう。そう思つて俺は約束をした。今日も疲れた。精一杯今日を生きたつもりだ。早く寝よう、明日が楽しみだ。

俺はそんな子供みたいな事を考えながらベットに入った。

第2話見えない気持ち（後書き）

こんにちは、聖司です。

なかなか書けませんでした。

更新速度が遅くてなんていつたらいいやら。

学校の方も文化祭ちかくてホントまいつてます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0365a/>

命の灯火が消える前に

2010年10月12日01時36分発行